

現代日本の「実学」と「美学」(前半)

——人間形成の思想をめぐる考察——

城 達 也

はじめに

「建付け」も決まらず、一方でエゴ丸出しの案を出す者、他方でやる気なく傍観者になっている者。前者はフェアプレイよりも後者の支持を得て“奈良判定”に持ち込もうとする。こんな組織運営で大学の今後と学生の将来に対して責任ある教育体制ができるわけもない。骨抜きにされた「理事会主導」では、財界からの学外理事を内部の教職員が利用して、それぞれのエゴを達成するための「改革」をしているだけである。一方で古い思想の達成という政治運動、他方で教員ポストの取り合いという実益闘争。さらには分かりやすく、寄付で猟官運動をする者まで現れる。そこに「学生」という視点がない。ほとんどは現状維持派であり、たまに「改革派」の教職員が現れても、合意の努力もなく強権的に振る舞い、公的な事業政策のなかに自分自身のエゴを密かに盛り込む。自分の好き勝手にできる機会を利用してつねに「大きな葛籠」を開けようと欲張って失敗するのである。

本当にやる気があるならば、高い報酬を出してコンサルタントに頼まなくとも、無料で分かるデータと企画者のやる気だけで十分だ。例えばリクルート進学総研のホームページから誰でもダウンロードできる資料には、これからの社会で必要となる人材がまとめてある。「情報や医療などでの先端技術」、「国際化」、「少子高齢化」、この3つに対応する人材が必要であるという[リクルート進学総研 2017]。そうであれば、既存学部の改良も含めてこれからの教育体制を考える建付けは明らかであろう。ようは教育において、いかなる人材を育成するか、この表現が嫌いな左翼の御仁に合わせて言い換えれば、いかなる人間を形成するかが大事なのである。

さて、無駄だった議論の中でも、教育体制についていくつかの疑問が出てきたことは「収獲」かもしれない。そこから、本稿では以下の三点を取り上げる。

① 教養主義とマルクス主義の関連性

いまでも日本の大学ではいわゆる「教養」の理念による人格形成を目指す教育政策が提唱されている。ところがこのような提唱者を観てみると、現実政治や社会に疎い学究気質の教員とともに、必ずそこには左翼政治運動家、マルクス主義者がいる。すでにこの結びつきに関しては、竹内洋や筒井清忠の研究で明らかであるが、本稿では第二次世界大戦後、とくに全共闘運動からの変化という点に関して、この教養主義とマルクス主義との結びつきを明らかにしたい。

② 教養主義者、そしてマルクス主義者の「体育」に対する嫌悪感

戦後日本の一般教育課程では「体育」の授業が必修で含まれていた。かつての教養部組織にも体育科があった。それにも関わらず、現代の教養主義者やマルクス主義者が「体育」を嫌悪するのはどうしてなのか。本稿では、戦前の教養主義者、あるいは戦後マルクス主義、そして新左翼を見ていく。

③ 現代における「実学」あるいは「実学」の消滅と再生可能性

もともと「体育」も含めて「教養」の理念は一種の道徳性の獲得を目指したものである。本来の「実学」の意味も、たんなる「実益」とは異なった意味が含まれていた。さらにはこの「教養」には、「美学」的要素もある。左右に関係なく、「教養」は実学であり美学であった。ところが、経済的豊かさが増進したこんにち、もはやこうした左右の実学、美学は学生ではもちろん、世間一般でも消滅している。もはや実学や美学は存在意義を失ったのだろうか。エリート階層の「ダンディズム」、庶民の「ワル」をトピックに取り上げる。

現段階で本論文は概念枠組みの提示を中心にして、二次文献を参考とした議論に過ぎない。それでも直面する現実課題への対処提案として、ご覧いただけるのではないかと思う。

本稿の構成

はじめに

第1章、修養主義、教養主義、そしてマルクス主義の人格形成思想

第2章、第二次大戦後の旧左翼と新左翼の人格形成思想の展開

第3章、教養主義的政治主義と「体育」への嫌悪感

3-1 教養主義とスポーツ

3-2 左右の急進主義のスポーツ観

[以上、本号掲載]

[以下、次号掲載予定]

第3章 教養主義的政治主義と「体育」への嫌悪感

3-3 三島由紀夫のヴァイタリズム

3-4 全共闘の行動主義

第4章 「実学」、そして「美学」の消滅と再生

おわりに

第1章、修養主義、教養主義、そしてマルクス主義の人格形成思想

1-1 明治期の人格形成の考え方

人間の成長に対する考え方は昔から階層の違いに関わらず当然にも存在してきただろう。明治期日本では立身出世、経済的成功だけではなく、江戸時代の武士階級である吉田松陰（1830-1859）などの行動主義的な人格形成の影響があった。

「実学」については、前稿「中小私立大学の現状と、こんにちの『実学』（『大阪経大論集』第70巻4号、2019）ですすでに見てきたように、明治時代に「実際に役立つ効用性をもつ学問」だけでなく「実践的な学問」「実証的な学問」などさまざまなニュアンスを含んでいた。なかでも陽明学者の中江藤樹（1608-48）が道徳的な実践のための学問という意味で用いていたことを源流としていたという〔源 1986：39-48参照〕。また吉田松陰は山鹿流軍学師範の家柄であり、知識よりも実践を重視し、読書で得た知識だけでなく、強い意志を持ち実践することが大切だと述べた。彼は獄中でも、学者になるな、人は実行が第一だと実学を唱えたという。それとともに松陰は旅を大切に、「見聞」という実践で魂を奮い起こすことが必要だと述べた〔木村 2005：97-102, 143, 171, 193参照〕。

明治期では、西洋の学問を学びながらも柔道を通じての人格形成を述べた嘉納治五郎（1860-1938）が明治24年（1891年）に旧制五高校長、明治26年（1893年）に東京師範学校の校長に就いている。大正教養主義のきっかけとなる新渡戸稲造（1862-1933）が一高校長になるのは10年以上後の明治39年（1906年）である。つまり先に柔道などでの身体的修練による教育方法があり、その後に読書など文化的な人格主義が出てきたといえる。井上俊が指摘しているように、旧制高校卒のエリート階層たちも自己成長のために柔道を学んでいる。井上によると、明治15年（1882年）創設の初期の講道館の入門者には、財部彪（1867-1949・海軍兵学校・海軍大将・海軍大臣）、若槻礼次郎（1866-1949・一高・東京帝国大・大蔵省次官・大蔵大臣・総理大臣）、広田弘毅（1878-1948・一高・東京帝国大・外務省外交官・外務大臣）らの名前があるという〔井上 2000：79〕。

これはあまり知られていないが、教養主義の本家であるドイツにおいても、実は教養の神様といわれている18世紀の文豪J・W・ゲーテ（1749-1832）ですら、まさに書を捨てて旅に出て、様々な出来事に触れ、人に接することを人格形成にとって重要だと述べている。ブルフォードによると、ゲーテは完成することのない自己陶冶の過程にある存在として人間を捉え、とくに人生経験により行動を統制すべきだと述べた。彼の小説では、主人公は教育よりも様々な経験から人生哲学を獲得する。他者との交際の中で経験を増大させることが自己陶冶に大事であるという〔Bruford 1975: 30-3, 55-7〕。また、ドイツの古代美術史家J・J・ヴィンケルマン（1717-68）も古代ギリシャの彫刻に表現された男性像を理想とした。彼は、1764年の『古代芸術の歴史』などにおいて、形の美しさが内面の正しさを表現すると唱えた。彫刻の若い運動選手像には力強さだけでなく、調和や均整、自己抑制が示されていると考えた〔Mosse 1996: 29-31〕。すでにカント（1724-1804）は生きていたものの、F・W・フンボルト（1767-1835）が1810年に新人文主義のベルリン大学

を創設するまでまだ時間がある。

日本について筒井清忠は、それまでの庶民的な修養主義の例として、明治37年（1905年）に創設された一燈園の西田天香（1872-1968）を挙げている。それは托鉢と奉仕の懺悔を通じての人格形成であった。西田以外にも清沢満之（1863-1903）、網島梁川（1873-1907）らはさまざまな手段で「努力して人格を向上・完成させること」を説いた人格主義であった〔筒井 1995：9,85〕。

現代日本でも、このような庶民的な人格形成の思想は、例えば京都賞など稲盛財団を創った京セラの稲盛和夫に表れている。彼のいう「人格教育」とは、勤労への価値などを中心とした一次的道德教育のことである。社会のルールやモラルを教えて、とくに仕事で一生懸命働くことで心が磨かれるという職業観を各自が身につけるべきだという〔稲盛 2004：198-9〕。稲盛は、二宮尊徳や、稲盛の郷里である鹿児島県の西郷隆盛を持ち出しながら、日々の仕事を精魂込めて一生懸命おこなうことが魂を磨き心を高める「修行」となり、厚みのある人格を形成すると説く。「哲学は懸命の汗から生じ、心は日々の労働の中で鍛錬される」という〔稲盛 2004：21-23〕。

現代だけでなく昔から経済エリートや庶民層では、こうした労働による人間形成論が主流だったのではないだろうか？ のちに大正教養主義で見られるような文化主義と平行して、人格形成において労働こそ大事という発想や、あるいは天下国家を実際に掌握する行動の人こそが尊敬されるという価値観は、明治期から途切れることなく続いていたのかもしれない。ナチスが「労働せよ、されば自由を得られん Arbeit macht frei」と強制収容所の入り口に書き込んだのは有名である。知識人よりも「行動人」こそが理想であっただろう。

さて、こうした明治期の庶民的な人格主義としての「修養主義」がやがて教養階層を担い手としたエリート文化による人格主義へと変わって行くのは、筒井によれば、明治39年（1907年）9月に一高校長に赴任（大正2年辞任）した新渡戸稲造によるところが大きい。庶民層とエリート層が渾然とした「修養主義」の中から、エリート階層による文化主義的な「教養主義」が出てきたという〔筒井 1995：19,49〕。

新渡戸の議論についてはすでに前稿でも取り上げたので繰り返しになるが、少しでも復習すると以下の通りである。まず彼は教育の目的について、「教育の目的はいかに深淵なる学理の攻究研鑽を積むも、……活社会に処して活動するの能力を養うこそ教育の最大目的なるべけれ」という（「教育の最大の目的」1911年）〔新渡戸 2007：71〕。たしかにこれは人格主義である。しかし新渡戸の場合はエリート文化主義に囚われていない。「あれはちょっと学者みたような、役人みたような、弁護士みたような、また商人のような所もあるという何だか訳の分からぬ奴が、僕の理想とする人間だ」（「教育の目的」1907年）〔新渡戸 2007：46-48,53〕。具体的な修養の方法としては、「静粛に黙座してじっと心を養う方法、それから大きな声で詩を吟じる。精神鍛錬」「冷水浴、日記を書かせる、繰り返すことが意志の錬磨になる」。ようするには、理屈だけでなく、実行することで、「意志の修養」になるという。「意志の修養は、論を説くのではなく、実行しなければ効果皆無」

（「教育家の教育」1907年）〔新渡戸 2007：56, 63-66〕とも述べており、まさに松陰を彷彿させる。

このように、新渡戸稲造が、立身出世など社会的成功に対して、人格形成を教育の中心にしたという意味ならば筒井の言う通り、彼によって「教養主義」は始まったと言える。しかし「文化の享受による人格の完成」というエリート文化主義の意味での「教養」であるならば、新渡戸稲造の段階ではまだ「教養主義」と「修養主義」とが混在していた〔筒井 1995：32, 84〕。新渡戸は、人格形成の方法として、将来の知的エリートになる生徒たちには生徒向け、一般大衆には大衆向け、それぞれの「修養」という人格形成があると考えていた。エリート主義に限定されない自己成長のあり方を新渡戸は唱えていたといえる。

ちなみに民主主義に対する新渡戸の考え方については、たしかに新渡戸は「デモクラシー」に賛同していた。笠松は大正8年（1919年）2月にデューイが来日した際に、デューイ夫妻は新渡戸稲造宅に宿泊していることを指摘する。デューイを迎えたのは吉野作造らの黎明会の連中であり、このとき新渡戸も黎明会に入っており、武士道よりも「平民道」を唱えていたという〔笠松 2010：31-4〕。笠松ではデューイを家に招き入れた人物として、新渡戸はかなりデューイ寄りに描かれている。しかし、この時期に新渡戸が書いた論考を読むと、新渡戸が単純にアメリカの教育を礼賛したのではないことが分かる。

新渡戸はアメリカの教育を批判して、「アメリカの教育法は普通教育。良国民をこしらえることがその目的」だと述べている（「今世風の教育」1903年）〔新渡戸 2007：21〕。むしろ、政治コミュニティの運営などというのは新渡戸に言わせれば「二次的」なものに過ぎない。「根本は人の真心以外にはない。その根本の極くプライマリーの所を言わずに、第2次なるセコンダリーの所に重きを置きまして両者の間に連絡が取れないようになってボツボツとただ第2次の義務を述べるのが誤りの元である」（「人本位の教育」2014）〔新渡戸 2007：89〕。

また別の論考でも新渡戸は吉田松陰の辞世「かくすればかくなるものと知りながら、止むに止まれぬ大和魂」を引用して、この歌の意味は、矩に背けば外部の自由を失う、生命も失う。それを承知でも心の中に発せられた内部の矩に従わざるを得ないという心情を謳ったものだという。そのあとに続けて新渡戸はデモクラシーについて説いており、真のデモクラシーは内部の矩すなわち自己の良心にしたがう自由を理解してこそ達成されるという。これは西洋的な人格主義だが、新渡戸はすでに吉田松陰の「大和魂」の中にそれがあるというのである（「自由の神髄」1919年）〔新渡戸 2007：211-2〕。

1-2 エリート文化に基づく「大正教養主義」の展開

それでは、本当に学者エリートたちの成長物語として文化主義的な「教養主義」がいつ出てくるのかといえ、それは新渡戸稲造の一高の弟子たちであったと考えられる。筒井の言うように、その中心が和辻哲郎（1889-1960）である。大正6年（1917年）の和辻によって、「教養」は明確に「精神の芽を培養する」ことだと述べられた。筒井はこれをまさに「教養主義の成立宣言文」だと指摘している〔筒井 1995：89-90〕。

竹内のまとめでは、大正6年（1917年）5月に『思潮』が創刊される。主幹は阿部次郎（1883-1959・一高・東京帝国大）、同人に安倍能成（1883-1966・一高・東京帝国大・昭和15年＝1940年から一高校長）、和辻哲郎がいた。和辻が大正8年（1919年）に出した『古寺巡礼』はベストセラーになる。『思潮』は1年8ヶ月21冊で終刊したが、大正10年（1921年）10月に『思想』が創刊され、編集には阿部ではなく和辻が携わった。他方で明治から続く『中央公論』は大正5年（1916年）に吉野作造を看板学者にし始めた〔竹内 2018：206〕。

阿部次郎は『人格主義』（大正11年）にて、「人格」は「精神」「統一的自我」などを特徴とする内面的活動の主体、自己の統合原理だと述べる。和辻とともに阿部次郎によるこうした人格主義が大正教養主義を形成するが、それは修養系的人格主義ではなく、新カント派哲学の人格概念を基にしている。竹内の言うように、人格主義と文化主義が合体して大正教養主義が構成されたのである〔竹内 2018：219-6〕。

マルクス主義の登場で一度は途絶えた教養主義は、河合栄治郎（1891-1944）によって復活する。彼は新渡戸が一高校長時代の生徒である。昭和11年（1936年）から昭和16年にかけて「学生叢書」12冊を刊行し、昭和教養主義のバイブルとなった〔竹内 2018：308-9〕。

河合栄治郎は新渡戸稲造からまさに人格形成の教育を受け取った。彼の「新渡戸稲造博士」という文章にこうある。「東京の商人の家に生まれ東京で小学中学を卒へられた私には教養と云う雰囲気まったく欠けていた。そして多くの当時の青年と同じように立身出世を夢みて、その為ばかりで勉学を鞭っていたのであった。そうした私にとって、博士を校長とする一高の生活は正に驚異であった。はじめて俗世の立身の外に、人世の目的があることを教えられた。」〔河合 1935：295〕。「一高学生の狭隘な天地から解放して、豊かな広い外部の社会に引出し、他方に於いては固陋な国家主義と立身出世主義とに反対して、豊かな人間としての教養を説いた」〔河合 1935：302-3〕。

さらに「大学改造論」で河合は、大正7年の「大学令」第一条の「人格の陶冶及国家思想の涵養」という目的を達成するためには哲学、倫理学、社会哲学、政治哲学、経済哲学、社会思想史による「社会科学部」を新設すべきだという（「大学改造論」昭和9年）〔河合 1935：245, 277〕。マルクス主義理論に対抗するため自由主義の理論を作りたいのであろうか、かなり人文教育としては特殊な案を出している。

こうして、ハイカルチャーの知識主義的な「教養」を自己成長の中心と考えるエリート文化が旧制高校や大学にて形成されたといえる。大正7年（1918年）の「高等学校令」では、「国家男子ノ中堅タル中流階級ニ対スル教育」として「高等普通教育ヲ完成スル」という文言が入る。天野によると、このときすでにアメリカのリベラルアーツをモデルに、「品位陶冶」の教育観に基づく高等普通教育によって中流階級を形成しようと企図された〔天野 1989：410-2〕。また帝国大学以外の官公私立の大学設置を認めた同年12月公布の「大学令」でも明治19年（1886年）に出されたそれまでの「帝国大学令」にはなかった「人格の陶冶及国家理想の涵養」が追加された。こうして文化主義的な自己成長、読書などによる内省的な人格形成が制度的にも教育の中心となっていく。ただし現実には高等学

校は普通教育よりも予備教育の機関となり、また大学も経済学や法学等の学部はサラリーマン養成として「組織人」と「教養人」の両方の育成機能を持った。この完成教育と予備教育の2つの機能は第二次大戦後でも「専門教育」と「一般教育」のかたちで残っていく[天野 1989: 414-7]。

つまり部屋に閉じこもって読書する虚弱な学生たちのための成長戦略として、エリート文化の教養が唱えられる。しかもこれはブルデュー的に言えば、他の階層に対する象徴的暴力として、自分たちの成長のあり方を特権化するものであった。それはまた同時に新渡戸にとっては、学問や思想などの精神的なものから具体的・実的な修身法が分離してしまうという危惧でもあった。実際にも元来の「修養主義」から、学問思想だけ分離した「教養主義」がエリート階層の文化として登場するのである[筒井 1995: 35]。

こうした教養階層の文化が広まるのは、日本でもドイツでも時代的な条件がある。ドイツで経済発展するのはまだ1870年のビスマルクによる帝国統一まで待たなければならない。よってカントの『純粹理性批判』（1781年）が出た18世紀後半から、1810年ベルリン大学設置を経て、経済が発展する19世紀後半までの約一世紀近くは、貴族階層と経済エリート層とを抑えて、大学知識人を中心とする教養階層が文化的影響力はもとより、政治力も持っていた時代である。そのような時代の要請にしたがって生まれたのが個人主義的なカントの「全人的」人格形成の考え方であり、それに即したフンボルトの大学制度の制定であった。マールブルク学派のコーヘン（1842-1918）やナトブル（1854-1924）と西南ドイツ学派のヴィンデルバント（1848-1915）やリッケルト（1863-1936）ら、新カント派が出てきた19世紀末は、まさに最後のエリート階層の文化的復興だったかもしれない。

日本よりも一足早く、近代ドイツのエリート文化を形成してきたドイツの教養階層 *die Bildungsschicht* が自分たちの文化の没落を感じ始めたのは19世紀末のことであった。ワイマル時代になるとこの雰囲気は急速に広がった[Ringer 1969=1991: 170]。「教養 *Bildung*」などという言葉は古臭いものとなった。スターンが描いた19世紀末から第一次大戦後に登場した保守革命の思想家の態度は、当時の学生にも当てはまっただろう。彼らは、教養ある人々はすべてのことを知るべきだという新人文主義教育に反発し、先例尽くめの講義と内面の修養に嫌気が差していたのである[Stern 1969=1988: 114, 237-8, 354-6]。

以上見てきたように、日本では明治から大正期にかけて、日露戦争や第一次世界大戦による経済発展で経済エリート層や労働者階層が出てくる以前に登場したのが教養階層であった。彼らによって旧制一高や東京帝国大学を中心としたエリート文化主義による人格主義が展開された。教養主義は、庶民階層の人格形成とは区別した、あるいは経済市民層の「立身出世」の価値観への対抗イデオロギーとして、教養階層が経済エリートや労働者と自ら差異化するためのものであった。人間成長のあり方として「エリート文化の内面化による人格主義」を定式化したのである。またそれは新カント派を基礎にしているように近代理性への信頼に基づいていた。

1-3 マルクス主義的教養主義の人格形成

確立したかと思えた「教養主義」だったが、ところが筒井や竹内の研究のように、読書だけでの内省型の自己成長に飽き足らず、理念に基づく政治活動により社会変革をする自己成長の願望へと変化していく。それがマルクス主義的教養主義である。筒井の言うように教養主義からマルクス主義へという回路がここに存在する〔筒井 1995：95,99〕。竹内によると、すでに大正12年（1923年）には「教養」ということばは古く感じられたという。人びとの関心は、自己の内部に閉じ籠るより外界に自己を見いだす民主主義、さらには社会主義に移っていた。阿部次郎の人格主義は社会主義から、また吉野作造の民本主義はマルクス主義と国粹主義の両方から批判された〔竹内 2018：244-7〕。

竹内は北一輝（1883-1937）の弟の北吟吉（1885-1961）を例にして、彼が、大正教養主義は、「模倣・借用知識」だと見て、「学者的良心に忠実なるがごとく装ひて、民衆との接触を回避する」と指摘していることを取り上げている。そこで、このような大正教養主義の超克として、昭和期の教養主義は、人格主義を元にしながらも、「教養主義的政治主義」とでも言うべき、左派からはマルクス主義、右派からは蓑田胸喜（1894-1946）の「原理日本」が出てきたという〔竹内 2011=2015（上）：55〕。また、東京帝国大学に新人会が結成されたのは早くも大正7年（1918年）で、当初は吉野作造の「黎明会」とも関係があったが、やがて大正10年（1921年）から学内団体となり、マルクス主義の影響を受ける。体制批判的で教育のある人びとという「インテリ」層、知識階級が日本で登場したのはまさにこの新人会結成あたりである。とくに「左傾学生」による現実の政治活動は昭和3年（1928年）ごろから増大し始め、昭和7年（1932年）が当局による検挙者のピークだった〔竹内 2011=2015（上）：334-338〕。

教養主義の根っこにある人格主義は、政治運動に参加する左傾学生にも影響しており、教養主義の内面化が強い学生ほど政治活動に走りやすかった。彼らは、遊んでいる享楽型学生や、与えられた知識を記憶する体制同調型学生を嫌った。左傾学生は個人の内面倫理を超えて、マルクス主義によって社会や民衆のために行動する「正義」や殉教の倫理を新たに獲得したのである〔竹内 2011=2015（上）：350-2〕。

さらに竹内の指摘で興味深いのは、マルクス主義の「左傾学生」は地方出身のインテリと親和性があったという点である。つまり地方から出てきた学生がブルジョア都市文化に接して、その価値を転倒して無化するために、都市の「生活者」というものへの負い目の意識を梃にして政治的に行動する自己形成へと進んだという〔竹内 2003：195-6〕。この点は、マルクス主義だけでなく、やはり昭和10年代の大学に広がった日本精神やアジア主義などの国家主義についても言えるだろう。自分たちもその資本主義の恩恵を受けているエリート教養階層としては、「庶民」にコミットすることで、新たな「人格」形成を図ったといえる。

ただし、竹内の調べでは、昭和10年代の帝国大学学生には、マルクスやエンゲルスよりは、『古事記』『万葉集』『論語』がよく読まれている。また、昭和13年（1938年）の東京帝国大学生の尊敬する人物調査では、ゲーテとともに、西郷隆盛、吉田松陰、乃木希典、

楠木正成らが上位を占め、さらにヒットラーも入っている〔竹内 2011=2015（上）：82-83〕。知識人よりも「行動の人」が尊敬されていたのは興味深い。

第一次世界大戦を経て、日本経済も大いに発展し、一方で産業エリート、他方で労働組合エリートが出てきた。ドイツで一足早くそうなったように、日本でも文化的エリート階層は文化的影響力も政治力も失っていく時代である。そんな時代に教養階層は、「近代理性」に基づく自らのエリート文化主義を保持しながらも、それをマルクス主義あるいは国家主義などの政治的志向と結びつけ、自らの存在意義を確保したと言える。それは第二次大戦後のマルクス主義インテリにも継続しており、国家官僚制や独占資本主義を批判して、それと区別される「生活者」を擁護する立場を堅持することになる。第一次世界大戦が終わった大正・昭和前期でもすでに、ブルジョア社会の日常を超越して、生きる意味と行動の自由を得るために、ある者はマルクス主義の政治活動に、ある者はまた国家主義の活動に、そしてまたある者は戦争へと身を挺したといえよう。

第2章 第二次大戦後の旧左翼と新左翼の人格形成思想の展開

2-1 新制大学での「一般教育課程」

第二次世界大戦後の日本では新制の教育制度がつくられた。その最大の特徴が「一般教育課程」である。大崎仁によると、戦後の新制大学は占領下にあっても「一般教育」の目的・概念が混乱していたという指摘は重要である [大崎 2003：講演レジュメ]。大崎によると戦後の新制大学設置はGHQ内のCIE（民間情報教育局）の主導でなされた。CIEは一般教育の導入に熱心で、アメリカの大学システムのように学部は基礎的・教養的教育をして、専門教育は大学院という考え方だった。CIE主導で昭和22年（1947年）に設立された大学基準協会は同年「大学基準」を制定する。昭和24年には新制国立大学が発足し、また公私立大学や専門学校も新制大学となった [大崎 1991：278-9]。

一般教育の目的は3つあった。第一の目的は「指導的市民，人間完成，庶民教育」。人間完成と市民教育が一緒になっている点でも教育理念は混在しているが、「大学基準」が一応の完成をみた昭和26年9月に大学基準協会が出した文章でも、一般教育は「人間完成教育」のため「広い視野を与える」と書かれる一方で、「民主主義国家を支える指導的市民層として広く政治や世界に及ぶ幅広い知識を持つこと」とも述べられており目的が多様である [大崎 1988：81-4]。第二の目的は、アメリカ教育使節団報告書にあったアメリカ流の「普通教育（general education）」であった。しかしこれはやがて「一般教養教育（general cultural education）」、そして昭和25年の改訂大学基準では「一般教育（general education）」と訳語が変化したように、なぜ「一般」「普通」の教育をするのか理解が不十分であった。そして最後の目的は「人文科学重視か3系列均等履修か」という点である。これも、何のための一般教育なのか不明確であるために、人文科学中心にすべきかどうか分からなかった [大崎 2003]。

結局、「大学基準」では人文・社会・自然を各3科目以上履修すべきだと記載されるが、この新制大学の基本理念と構想は昭和21年発表のアメリカ教育使節団の報告書に基づく。その目的は普通教育（general education）を導入し、ヒューマニズム的態度を養うことにあった。さらに昭和23年にはCIEから「11ヶ条の原則」が出されて、国立大学に教養科を文理学部として設置すべき主旨が書かれている [大崎 1988：5-7, 79-81, 133-4]。もともとハーバード大学の「自由社会における一般教育」（通称レッドカバー）がリベラル・アーツの教本であり、民主主義の理念を実現するための教育はどうあるべきかを示してあった。「リベラル・アーツ」の理屈が新制大学設置の突貫工事の「教育」らしさを正当化した。またGHQによって「二度と戦争を起こさない日本人の育成」という市民教育の導入という大義名分もできた。アメリカのリベラル・エデュケーションは当初から政治的参加をおこなう市民の育成という目的をもっていたという [大崎 2003]。

実際に日本でも1960年末の東大闘争に参加してのちに筑波大学教授になった小野澤正喜（1963年東大入学）は、軍部独走を許した反省から「批判精神の欠落した大学制度の断罪」としてGHQ主導の教育改革がなされたという。そして東大教養学部こそは、アメリカ型

リベラル・アーツ教育の府と位置づけられ、「幅広い視野と柔軟な発想を鍛錬する場」となったとか。専門教育に特化する前の2年間、学生たちは国内外の政治経済や文化思想を学び、天下国家を語る時空間を保証された。やがて「駒場は「学生運動のメッカ」と呼ばれるようになった」と回想している〔小野澤 2019：209〕。

さて話を戻すと、一般教育導入の混乱要因はさらに新制大学が旧制大学よりも一年早い入学年齢になったという御都合主義が関係していた。そこから旧制高校の教育課程が大学に持ち込まれる。旧制高校では3年間で文系が98単位、理系が96単位を取得する。そのうち「体育」はどちらも9単位であった。それに対して文科でも「哲学・心理・論理」は7単位しかない。理系だと「心理・法・経」で4単位である。この他文系では「第一・第二外国語」37単位、「国語・漢文・修身」19単位、「歴史・地理・法・経」18単位、「数学・自然科学」8単位である。大崎によると、正課の授業として哲学は少ないが、むしろ旧制高校の文化として哲学書を読んだという。こうして、戦後日本の大学においては、「市民の育成」と「幅広い知識」と「旧制高校組織の改編」という3者が見事に結びついたのである〔大崎 2003：講演レジュメ〕。

吉田文も同様に戦後大学制度は、CIEによって持ち込まれ、それを大学基準協会に集まった教授たち、城戸幡太郎（1893-1985・北海道大教育学部教授）、務台理作（1890-1974・東京文理大学長）、玉虫文一（1898-1982・東大教養部教授）がまとめて、さらに文部科学省がほぼ追認したという。昭和31年（1956年）の文部科学省令として最初の「大学設置基準」でも、一般教育36単位（1950年当初はこれ以外に外国語16単位と体育4単位）で、人文・社会・自然の配分必修制による均衡となった〔吉田 2013：78-80, 89-90〕。

「一般教育」の履修基準はそれから少しずつ緩和されていく。昭和31年の文部省令による「大学設置基準」の制定と改正では、一般教育は8単位まで「専門基礎教育科目」で代替が容認された。また総合科目が設置されて、3系列均等履修が緩和された。ところが他方で、各学部内で学内措置としてあった教養課程担当は、昭和38年（1963年）の国立学校設置法改正により法的根拠を得て、多くの国立大学で教養部として学部準ずる組織となった。私立大学でも1963年から1991年の大綱化に至るまで、「教養部」が設置される〔吉田 2013：90-2, 127-8, 146-8, 154-5〕。大きな転換点は、平成3年（1991年）、学校教育法と大学設置基準が大幅に改正されたいわゆる「大学設置基準」の大綱化であった。4年一貫教育が強調されて、それまでの「一般教育科目と専門教育科目」という教育区分、そして区分ごとの必要単位数の縛りが大幅に緩和された。これによって一般教育担当教員数やその所属組織の存在根拠がなくなったのである〔吉田 2013：217-8〕。

大崎仁は近年また教養重視の二元論に戻っていると警告する。とくに平成期の前半で専門・教養の二元論を前提に、教養教育重視がまた広がったという。また平成10年の大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）』では、「学部は教養、専門は大学院で」というアメリカモデルの考え方も出てくる。大部分の学生は学部卒業だけであり、事実上の学部教育の放棄策である。さらに平成14年の中央教育審議会『新時代の教養教育』では、生涯教育の観点で教養を捉えるという提言がなされる。これもかつてのハーバード

大学のリベラル・エデュケーションと共通しており、いわば自由社会における民主主義の理念達成のための市民教育である。

いまや第三者評価が義務化されている。認証評価機関による定期評価の義務化は、平成16年（2004年）4月に発効された。国立大学独立行政法人においても中期計画や年度計画、業績評価とその公表が定められたが、大学評価機構が評価を通じて教養教育重視の方向へと大学を「誘導」し、画一化することも懸念される。大崎は結局、当初から混乱していた「教養教育」に対する理解をもっと具体的に議論する必要があるという。また大学の正課教育のなかで可能なカリキュラム化の限界もある。大学ができること、あるいはしたほうがよいことは何かを考えて、限定することが必要である。理想だけで走ると行き詰まるだろう、そのようにまとめている〔以上、大崎 2003：レジュメおよび口頭発言のメモ書きから〕。

すでに戦後も70年以上が過ぎている。そのあいだに「一般教育課程」の成果について、日本の教育学会も各大学も何も実証的に調べてこなかった。「進歩的」理念だけが先行し政治対立だけが目立った。そもそも「一般教育」が学生の「人格形成」に効果をあげたか、あるいは「市民教育」がうまくいったか、そのようなことは調査そのものが不可能である。学生たちのさまざまな経験の中から、どうやって「一般教育課程」の効果だけを選び出すのか。アンケートでは簡単に分かるものではない。結局は「教養か専門か」という正解のない議論だけが無駄に繰り返される。

2-2 第二次大戦後の知的雰囲気と「進歩的知識人」

ところで第二次大戦後の日本の大学の知的雰囲気はどうであっただろうか。筒井によると、戦後日本の大学も戦前と同じく教養文化が継続したという〔筒井 1995：69-70, 75〕。高度成長期を迎えて大学がもっと大衆化するまでは、大学は続き一部の知的エリート階層のものであり、そこでの人間成長物語は文化的教養主義に依拠したままであった。

これはドイツの大学でも同じだったようだ。内面性の重視という新人文主義的伝統の「教養」理念はナチス期の後も生き延びた〔Habermas 1988: 156-7〕。学問的関心はワイマル時代と同様に形而上学、認識論、人間学などの基本テーマが続いた。哲学書、なかでもハイデガーやヤスパスなどがよく読まれていたという〔Glaser 1990: Bd. 2, 288-9〕。他の階層出身者の教養階層への流入や、他の階層の政治力の上昇といった点を考慮しても、教養階層の中心である官吏や大学教授たちは戦後も依然としてその地位を確保し、一定の政治的権力を持っていた。非ナチ化政策を潜り抜けてきた官僚や教授たちの公職復帰によって、大学や国家機構はワイマル時代と何ら変るところがなかったのだ〔Kocka 1990: 21 ff.〕。

しかも終戦直後のドイツでは、ナチズムは大衆化時代の産物であり、「教養」と「文化」の対抗物であるという言説が展開された。すなわち戦争責任はヒトラーと大衆にあるという。「教養」の理念が復活し、「人格」の重視、「精神」への回帰がなされた〔Bollenbeck 1994: 303〕。とくに左翼知識人はワイマル時代と同じく戦後の連邦共和国でも自らの民主

主義や社会主義などの思想を原則として、理念を現実化するという思考形態に囚われて共和国を批判し続けた。そして60年代末の学生運動を契機にさらに急進化して権威主義化したのだった [Sontheimer 1982: 1067-71=1992: 117-123]。

さて日本の戦後論壇事情に関しては、竹内が岩波書店の雑誌『世界』の分析をして、文化的教養主義者から政治に口出しする「進歩的知識人」へと交代する様子を描いている。戦前からの「オールドリベラリスト」である和辻哲郎、安倍能成、津田左右吉 (1873-1961)、鈴木大拙 (1870-1966)、志賀直哉 (1883-1971)、山本有三 (1887-1974)、柳宗悦 (1889-1961) らは同心会の同人であったが、しかし編集長の吉野源三郎 (1899-1981) は自分より年上のオールドリベラリストの純粹文化主義や思索一辺倒に飽きたらなかった。そこで吉野と同世代の「進歩的文化人」による執筆陣を揃えたという [竹内 2011=2015 (上): 126-128]。

共産党シンパの『前衛』に対して、『世界』は社会党左派系シンパのインテリ読者層を受け皿として論壇を形成した。清水幾太郎 (1907-1988)、久野収 (1910-1999)、丸山真男 (1914-1996)、都留重人 (1912-2006)、松村一人 (1905-1977) ら、平和問題懇話会を中心とした「進歩的文化人」が執筆するようになる。このうち清水幾太郎は、昭和7年 (1932年) に戸坂潤 (1900-45) らによって設立された唯物論研究会の幹事をしていたことがある [竹内 2011=2015 (上): 154, 187]。

このように、文化的エリートが戦後になって左旋回する要因を、竹内は、戦前に外務大臣を務め、戦後も衆議院議員となった有田八郎 (1884-1965) に焦点をあてながら説明する。有田は、旧制一高から帝大、外交官、大臣という官学正統学歴コースに乗った学歴エリートであった。体制エリートの有田が第2次大戦後に左旋回したのは、まさに丸山真男のいう「悔恨共同体」の感情として自責の念があったからだという。有田に見られるように、戦後の「進歩的」知識人の多くは、この自責の念から「革新幻想」をいだいて、戦前までの日本を否定し反戦・平和を唱えたと竹内は主張している [竹内 2011=2015 (上): 72-79]。

ちなみに竹内も同書で取り上げている鈴木広の調査では、日本の社会学者200名に昭和40年 (1965年) の参議院選挙での投票先を尋ねて、回答を得た80名の結果、全体では自民党約9%に比べて、社会党約49%、共産党約14%となった。これを世代別に見ると、明治生まれでは自民党約29%で共産党はナシなのに対して、昭和6-10年 (1931-35年) 生まれでは社会党約71%、さらに昭和10年以降生まれだと社会党約39%と共産党約31%となり、両世代とも自民党への投票者がいない。また学問研究の動機を尋ねたところ、明治生まれはヒューマニズムや人間理解であるのに対して、昭和6-10年世代では日本の近代化や社会問題の解決が約半数、昭和10年以降世代では階級的実践や平和と民主主義の確立が約4割いる [鈴木 1970: 358, 368-9]。

さらに中野秀一郎による昭和48年 (1973年) の大学教員の政党支持調査でも、中央の大規模国立A大学の教員は自民党6.7%、民社党19.0%、社会党30.6%、共産党8.6%の支持だったという。地方国立B大学の教員もほぼ同じ。このA大学を世代別で見ると、60代で

自民党支持が11.1%，社会党14.8%，50代で自民党9.8%，社会党26.8%，どちらの世代も共産党支持はナシなのに対して，40代では社会党28.9%，共産党12.7%，30代でも社会党42.2%，共産党9.3%と変化する。大学教員において「奉仕」という利他的志向や「科学」という普遍主義志向が商業主義の現実との軋轢を生む原因であり，彼らの左傾化の要因となっているという中野の指摘は重要である〔中野1981：247-8，251〕。

旧左翼に特徴的なことは，東京大学を中心とする文化的エリート，とくに大学教員や官僚などの教養市民層によるエリート文化主義を基本にしているということである。これは例えば日本共産党の大学論において明確に見られる。彼ら旧左翼が1968年の全共闘運動に直面したとき，知的エリート階層の擁護論を1968年11月10日『赤旗』で展開している。

そこでは大学問題について，「米日独占資本主義に直接従属させる「日米科学協力」，「軍学協同」「産学協同」など，米日反動勢力の反動的大学政策のもとで，学問の自由と大学の自治が広範に侵害されている」という。「本来，教育，研究の府であるべき大学が，経営者の専断と営利主義によって運営され，多くの大学で，日大に典型的にみられるように，経営者のおくべき腐敗と不正，学生の勉学・研究条件へのおそるべき無理解等を生み出している」。「こうした大学と独占資本の資金的結合は，大学を独占資本の支配下におき，教育や研究を独占資本の要求に直接従属させる結果となり，大学の学部，学科の性格，構成にも大きな変化をもたらしている。……「産学協同」は，大学の体質をかえるまでに深刻化している」と結論づけている〔日本共産党中央委員会 1969：9，12，28〕。

このように大学で教育研究されるべき学問については旧左翼も新左翼も重なる部分があるだろう。しかし大学運営主体をめぐる意見が対立している。ここでは新左翼が学生中心の大学運営を主張するのに対して，共産党は支持母体である教授会や職員を擁護する。

「「社会学」「中核派」「革マル派」「解放派」などとよばれるトロツキストらが，大学教育の現状に対する学生の不満と憤激につけこんで，大学を「革命」の「起爆剤」に利用すると称して実際には自分たちの反革命的破壊策動の拠点にかえようとし，暴力的な挑発活動をつよめ，反動勢力に弾圧と干渉の絶好の口実をあたえる。」「かれらは，大学を労働力商品生産工場にみため，「教育工場の管理者＝教授会＝権力」という図式をくみため，「教育工場」の機能を全学バリエードでマヒさせ，「教授会権力を打倒して学生の“自主管理”を実現したときに，大学再生の端初がきずかれる」と主張し，反動的な教授も，良心的・民主的な教授もひとからげに「国家権力の手先」として攻撃しているという。むしろ「広範な学生が団結し，良心的な教職員と力をあわせて」いくべきだと主張している〔日本共産党中央委員会 1969：9，19-20，22-23〕。

この文章が掲載された時期にすでに東大には学内に機動隊が入りバリエード封鎖などを排除していたが，最後の1969年1月の安田講堂の攻防はまだである。大正期に同じ知的エリート層として連帯感のあった教授と学生だが，大学の大衆化によって1960年代には学生は教授を自分たちの「準拠集団」と見なせなくなり，せいぜい「大衆団交」の対象物として扱った。学費値上げが争点であることは教授と学生が利害対立していることを表している。全共闘が「大学解体」を標語にしたのは象徴的であった。

2-3 現代の通俗的な「教養」と「実学」の理解

さて、こんにちでも大学の教員たちは、左傾化したオーソドックスな「教養」や「実学」の理解をそのまま維持している。マルクス主義に見られるように産業社会の実益に寄与する教育とそれ以外の「市民教育」という2分法が用いられている。さらに後者の市民教育として、産業社会を「超越」した人格形成に貢献する教育があるという。そして前者が「専門教育」であり、後者が「一般教育」であるという結びつけがなされている。

現在において学者たちの通俗的な教養教育理解を見るために、手元にある資料として2001年6月9日・10日に桃山学院大学で開催された『大学教育学会第23回大会 発表要旨集録』を見ていく。この大会には私も当時勤務していた熊本大学の大学教育研究センターから派遣されて仕事として参加している。大学教育学会とは、もとの「一般教育学会」であり、全国の教養部の教員たちの研究組織である。平成3年（1991年）の大綱化により教養部を解体する大学が増えてきたことに合わせて、学会名を「大学教育」と改めている。

大会発表プログラムを見ると、かなりオーソドックスな教養教育に関する発表が並んでいる。特別講演は元国際日本文化研究センター教授で桃山学院大学教授の尾本恵市による「人権教育としての日本文化」。シンポジウムは、「「グローバル化」時代の教養教育」で、発表者に沖縄大学・宇井純、東北公益文科大学・大島恵美子、国際大学・名和小太郎などである。

自由研究についていくつかピックアップすると、まず関西大学非常勤・安田忠典「プラトンの身体教育論——一般教養としての体育の源泉」では、プラトンの体育思想は運動競技の専門家について書かれたものでなく、ポリスの自由市民の哲人統治者を育成する教育プログラムの一環として構想されたと指摘されている。運動競技がプロフェッショナリズムとその観客になっていく状況でプラトンは「哲人統治者」教育プログラムを唱えて、体育教育を「勇気」「知恵」「節制」「正義」という「精神」への働きかけを目的として設定したという。プロ競技者養成すなわち専門職業人教育を人間教育にプラトンは修正したのだという論旨である〔大学教育学会 2001：92-93〕。安田は現在、関西大学人間健康学部教授となっている。彼はレスリング競技の専門家でありながら、南方熊楠顕彰会常任理事を務めたこともあり、研究論文もレスリングよりも熊楠研究のほうが多い。

また国際基督教大学・深尾暁子「教養としての英語教育」では、英語教育とは、「百科事典的な知識を蓄え、いわゆる「インテリ」になること」ではなく、社会で自分の責任と役割を見いだして貢献できる「個」の確立を促す総合的思考力の育成であるという主旨が展開される〔大学教育学会 2001：148-149〕。

「体育・健康教育」部会では、菊幸一（奈良女子大学）・海老島均（ダブリン大学）「イギリスにおける大学体育・スポーツ関連カリキュラムの動向と課題」は、ヨーロッパの大学では、社会的ニーズに応える実務的なマネジメント中心の教員養成カリキュラム、またはスポーツ専門家としての資格取得カリキュラムが中心となっており、そのため従来のアカデミック・レベルの維持が難しいという「課題」を提示している。菊はいま筑波大学、海老島は成城大学に属するどちらもスポーツ社会学者であるが、ここでも「専門性」の職

業重視への批判としてアカデミズムが持ち出されている〔大学教育学会 2001：198-9〕。

さらに沢田和明（滋賀大学教育学部）『『総合的な学習の時間』を意識した保健体育教科教育のあり方』は、2002年度から導入される学習指導要領の改訂で教科体育に「心と体を一体としてとらえ」という文言が入ったことを前提として、人間関係の学習の設定を検討している。沢田は体育教育において個別運動領域のスポーツそのものの「表学習」に対して、対人関係能力やリーダーシップ、コミュニケーションなどの「裏学習」が大事だという。そしてこの「裏学習」は生命の尊厳や基本的人権への接近も図りうる、調和のとれた「関わり」と課題理解の「気づき」だという〔大学教育学会 2001：204-5〕。

この沢田の報告は先ほどの安田や深尾の報告と同様に、専門的な教科内容そのものを超えて、一般的な人格形成として、アメリカ流の体育教育観に基づき対人関係能力などを養成することが教養教育であるという発想がある。これは、後述する「こころ化」論で平等が「こころの専門家のセラピーにゆだねる心理還元主義」と批判している部分と底通している。「専門家」は、カウンセラーであれ、アスリートであれ、官僚であれ、人格形成に貢献しないという二元論、しかも「善悪」の付いた二元論となっている。さらに言えば専門教育は「表学習」として実用的であり「専門馬鹿」をつくるのに対して、一般教育は「裏学習」として、人間関係能力、行動力そのほかの「人格形成」を達成できる、そういう紋切り型がここには見られよう。資本主義社会に体制化された知識とそれに対抗する知識。職業教育と市民教育・人格教育。「専門バカ」と「幅広いアカデミズムの知識」。そのそれぞれを、悪しき「専門教育」と善き「一般教育」が担っているという。こうした単純な枠組みがいまも大学教員のあいだで広く使用されていると言えよう。

さらにこうした紋切り型は、大学組織全体の教育方針を決める際にも使われている。例として、「人間の実学」を教学理念だとする大阪経済大学の場合、2010年度の認証評価のために提出された自己評価報告書に以下のように書かれてある〔大阪経済大学 2011〕。

……(前文略)……

(2) 教学の基本理念としての「人間の実学」

本学は、「人間の実学」を教学の基本理念としてかかげてきた。この「人間の実学」という言葉は、平成4（1992）年に策定された「21世紀をめざす学園マスタープラン」において、大阪経済大学学園マスタープラン委員会によって提起されたものである。それによると、「ここで実学とは、『人間普通日用に近き実学』（福沢諭吉）、すなわち実証性に裏づけられた實際生活に役立つ学問であり、官僚による支配のための学問に対する民衆すなわち生活者の知恵を生かす立場である」。また、「しかし、この実学思想には、単に実利的・実地的というだけでなく、人間の生き方や倫理性を問うという人間の側面があることを忘れてはならない」。すなわち、「人間の実学」とは、実社会で具体的に役立つ知識や能力の修得と、良識ある市民としての人間形成をあわせて追求するものである。……(後略)……

ここでわざわざ福沢諭吉を引用してくるのは、官僚支配の学問に対する民衆の知恵、という部分を強調するためであろう。ここでもやはり「善悪二元論」により、官僚と企業が

一体化して進める学問ではなく、「生活者」のための知恵が「実学」だという主張がなされている。しかし具体的にそれがどういう学問なのか分からない。物質的豊かさを追求する官僚・企業・実利という「悪」と、人間文化をトータルに捉えて諸個人の自立と豊かな人間性を育む「民衆・生活者・倫理性」という「善」が対比されているのが見て取れよう。

このように、現在も日本の大学関係者でみられる通俗的な理解では、「人間的」あるいは学ぶべき「理論」は、戦前のマルクス主義的教養主義、戦後のリベラル・アーツや進歩的文化人などに受け継がれてきた市民教育である。さらには「アカデミズム」は、先端科学が必要とされているこんにちでも、「幅広い知識」が求められ、またそうした一般教育を中心とする学問が「人格形成」にもなるという。大正教養主義の遺産は、いまやマルクス主義者ら自称進歩派によってさらに強化されて、単純な善悪二元論へと教育理念を変形させている。

2-4 新左翼の人格形成の態度と行動主義

経済的に豊かな社会となり、また大衆文化が一般化した時代にあって、全共闘の学生がもはや大学教授たちの十年一日のごとくのエリート学問になんの興味もなかったとしても当然であった。テレビでは様々な大衆文化が繰り広げられている。経済活動も活発である。なぜに昔ながらの教養階層の文化を学ばなければならないのか。1968年をピークとする大学紛争では、教授や既存知識そのもの、エリート文化の知識主義に対して、行動主義として、意志の力、自己抑制力、行動力、判断力が求められた。「反・知性主義」というよりは、「反・教養文化」「反・エリート知識人」というべき行動である。

竹内は全共闘の時代にある学生が丸山真男に対して「へん、ベートーヴェンなど聴きながら学問をしやがって」と言い放ったと記している。紛争の学生たちは、教養エリートを相対化して、「民衆的経験」を基盤とする吉本隆明（1924-2012）などに共感していったという〔竹内 2003：210-1〕。竹内の指摘するように、全共闘世代は大学と大学教員を敵視し、さらには反アカデミズム、反知性主義、反教養主義だった〔竹内 2011：107-110〕。ただし、竹内のいうようにそれを「反知性主義」と表現すると分かりにくい。実際はすべての知識というよりはブルジョアエリート文化に対する批判であり、その代わりにブルジョア文化や既存エリート階層を批判するマルクス主義などの知識へは傾倒していた。

同様にドイツでは大学紛争の逸話として、1969年、フランクフルト学派で碩学のアドルノ（1903-69）が講義をしている最中に、活動家の女子学生が上半身裸になってアドルノに近づいてきたことがあったという。この欲望の塊を前にして、知識はどう役に立つのかと言わんばかりに。アドルノはただ驚くばかりだったという。それからまもなくアドルノは死去したが、この女子学生の行動も、近代ブルジョア文化についてあれこれと語るアドルノに対する攻撃であった〔Glaser 1990: Bd. 3, 44〕。ただしこの場合は、エリート文化的知識に対する拒絶反応だけではなく、さらには理論だけでなく実践を求める行動主義でもあった。知識は分かった、だったら早く政治行動しなさい、ということである。ここで「理論」と「実践」の地位が逆転するのである。

フランクフルト学派は資本主義論とフロイトの精神分析を結びつけた。資本主義による「抑圧」がテーマである。ホルクハイマーとアドルノが『啓蒙の弁証法』で述べているように、近代理性により抑圧された人間の内的自然が問題である[Horkheimer und Adorno: 1947=2007: 37-55]。ところが新左翼は、抑圧された心理の分析を必要としても、それを使って個人心理の「平穏」をもたらす専門家の治療には反対する。社会問題はまさに社会のしくみの問題であるはずであり、それを個人心理の問題に「還元」してしまうことはフォーコーのいう近代社会の自己管理強制のひとつだと理解するのである。

その例として手元に『21世紀研究会2006年10月例会』という研究会案内のA4版1枚のチラシがある[21世紀研究会 2006]。例会のテーマは「「こころの時代」と「こころ化」の時代の論理」というものであった。チラシ下部に記載された宣伝文章では、「こころ化」というキーワードが説明されている。

(前略)…… ●「こころ化」は、社会のしくみや人間関係のあり方に起因する諸困難を、個々人の「心の姿勢」に還元します。それは不応の人たちを「こころの病」の患者として「こころの専門家」のセラピーにゆだねる心理還元主義による人間の危機管理の思想と技法にほかなりません。与えられた役割を「こころの操作」によって能動的・自律的におこなうようにさせる積極的な適応主義のそれでもあります。●「こころの時代」と社会の「こころ化」は、今日の知的道徳的ヘゲモニーをめぐる主戦場の一つといっても過言ではありません。「こころ化」の実態と論理を批判的に検討してみたいと思います。(平等)……(後略)

社会の側の作用によって生まれた個人の内的抑圧を個々人の「心の姿勢」の問題へと還元してしまう「こころ化」を問題にして、そのエージェントとして「こころの専門家」であるカウンセラーも対象とするという筋書きだろう。左翼において「主体」は人文主義的な「自律」として内的統制をするのではなく、あくまで社会改革へと活動する個人である。学生の進路に関しても彼らの理解する経済システムの外部での活動、たとえばそれはNPO法人ならばOKであり、「ボランティアの素晴らしさ」という思想を内面化して、みずから「自主的」に行動することが必要条件である。

ちなみに、私も大学生のとき、いつも図書館に閉じ籠もって読書する毎日であったが、しかしときには友人に連れられて、もしくは本の中に出てきた集団に興味を持って、いくつかの運動体を「見学」したこともある。そんなときには先方から必ずといってよいほど、その運動に誘われる。しかし私は基本的には本を読んでいるほうが楽しいので、そういう誘いを断る。そうすると、相手からはいつも、「君は理屈でよく理解できているのに、どうして運動に参加しようとししないのか?!」と言われて帰ってくる。まあ自分では、それらの強引な誘いを断っただけでも、「意志の強さ」を示したと思うのだが。

ある活動家の友人から岩波新書の梅本克己(1912-74)『唯物史観と現代』(1967年)を読めと奨められたこともある。理論は実際の活動によって証明されるものだという主旨である。そういう考え方もあるか、という程度で読み終えた記憶がある。しかし活動家たちにとっては1980年代でもまだそういう理屈を信じていた。さらに行動主義への傾斜として

面白い例では、現在60歳代半ばぐらいの東大出身の方から聴いたが、彼がかつて大学生のときに「実存主義空手道」のサークルに入っていたそうだ。突きや蹴りをするごとに、本人の「実存」が高まっていくのだそうだ。マルクス主義とともに実存主義も若者に大きな影響を与えたが、精神を陶冶するための道具として身体修練を理解するのはおもしろい。

実際、1980年代後半から出てくるオウム真理教などはまさに空中浮遊や水中滞在など、身体的な苦痛を与えることによって精神的な宇宙への「跳躍」ができると説く宗教である。最終的にオウムも社会革命を目論んだ。ただしその革命は、身体的な修行による人格形成において得られるのではなく、近代科学兵器の使用によって達成されるものだった。この点では、結局は連合赤軍と似たような行動をしている。革命を目指す戦士として克己を求めて総括しながら、しかし実際の革命手段は銃や爆弾などのテロリズムである。

教養教育を復活させよと再び言い始められたのはこのオウム真理教が問題となった時期であった。とくに化学兵器を作った信者が理系エリートだったことから、「専門教育よりも一般教養」と紋切り型の意見が出された。もともとジェネラル・エデュケーションに含意されていた、戦争をしない日本市民の育成という「人格形成」論と同じく、ここでも教養教育は市民道徳の教育による諸個人の統制の意味で使われている。

閑話休題。この時期に登場した新左翼も新右翼も、近代的な都市のハイブローなエリート文化を拒絶するとともに、意志の強さを重視する行動主義になっていく。もっとも、ここで行動する身体は、近代的自我を一度経由した身体性でしかない。まずは理念を内面化してそれに即して行動する「頭でっかち」の行動主義である。これに右翼においては肉体主義、左翼においては肉体の代わりにゲバ棒を持ち出す暴力主義が付随した。どららも、この汚れた近代都市社会を解体し、無垢な世界を創出するもしくは復活させるために身体を用いた。しかし理念に基づいて行動する限りでは現実感覚が希薄となり、無垢な世界の創出という急進主義や、失われた美の復興というロマン主義に陥った。理念に向かって頑張る自分、もしくは理想の「美」に向かって鍛錬する自分。いずれもある種、「人格主義」の先鋭化と言えるだろう。

前衛エリートが大衆を啓蒙する先駆主義は旧左翼にもあるし、いまでも中国共産党では鄧小平の「先富論」などが唱えられる。しかし新左翼ではさらに「議論に勝つこと」、討論という闘いの場で負けない自己の意志の強さのほうが「人格形成」に大事だったのではないか。そうであれば、結局は理屈ではなくゲバ棒でも爆弾でも構わないことになる。しかも、同じ革命に向かう意志でも、自分は他人と違うという気持ちが強くて、さまざまなセクトの分裂を繰り返す。これもまた、自己の人格を「個性化」するために無意識的に求められたのかもしれない。ただし、まったく独りではなく、つねに集団をつくって「同志」を集めている点では、いまのファッションでの流行と同じく、「個性化」といっても群衆行動に過ぎなかったと言えよう。

ここで新旧の違いをまとめてみる。旧左翼はいわばカトリック、あるいは浄土真宗の様相であり、その人格形成は社会の価値観や規範に従うだけで成り立つ。個人に対してそれほど厳しい自己成長を求めることはなく、社会規範を内面化すればよいだけである。これ

はブルジョア教養主義も同じであり、既存の教養エリート文化を読書によって吸収すれば、人格形成できると説かれる。それに対して新左翼はいわばプロテスタント、あるいは禪宗、さらには密教というべきか。まずはそれまで自己が従ってきた社会規範や価値観を破壊することから始める。そしてなによりも個人は「克己」して、革命戦士として自分をつくりかえる。できなければ「総括」することが求められる。「総括」は、知識不足ではなく、「意志の弱さ」を持つ自分に対してなされる。その行き着いた先が「リンチ」であろう。これは新右翼が厳しい肉体的改造を自己に課すことも同様である。このような厳しさは一般大衆には追随できない。連合赤軍にせよ、盾の会にせよ、厳しい人格主義は最後に社会から孤立していく。消費社会の誘惑に打ち勝つ自己を達成するため、1968年当時の若者たちの「抵抗」は過剰なまでの自己形成だったといえよう。

第3章、教養主義的政治主義と「体育」への嫌悪感

3-1 教養主義とスポーツ

第2章で見たように、アメリカ教育使節団報告書には「体育」が含まれ、身体技術だけでなくスポーツマンシップや協力の精神的価値を与える教育だとされた。しかし昭和22年に大学基準協会による「大学基準」では「体育」の記載はなかった。そこでCIE（民間情報教育局）が基準協会に要請して、体育4単位（実技と理論）が追加されたという。ただし本国アメリカでは体育は必修ではない[大崎 1988: 86-7]。これに対して第1章で見たドイツのヴィンケルマンや日本の新渡戸稲造のスポーツ観は自己の精神修養であった。現在では、大学教育学会の諸報告に見られたように、後者の修養主義的な考え方ではなく、前者のアメリカ流の理屈付けが蔓延している。

日本においては、井上によると、嘉納治五郎によって、「柔術」は「柔道」として近代化を果たし、広く社会的認知を得た。また講道館とともに武道の発展に寄与したのが明治28年（1895年）創設の大日本武徳会である。この会は大正8年（1919年）に元警視總監の西久保弘道（1863-1930）が副会長兼任で武術専門学校長に就任し、たんなる技術の向上ではなく、人としての「道」を教育することが重要だと考えたという[井上 2000: 49-51]。時代的にはちょうど大正教養主義の完成時期だが、その影響からか、武道も人の道として教育することだと述べていたということは興味深い。一方の講道館の嘉納治五郎は柔道の近代化による国民的規模の発展に尽力し、昭和5年（1930年）、朝日新聞社の後援を受けて全国規模の全日本柔道選士権大会を実現する[井上 2000: 54-5]。

しかし1930年代から軍国主義が強まると、武道イデオロギーが大衆に広まる。井上によると、そこから大戦後では、学校教育で武道は禁止された。他方でそれ以外の「スポーツ」は平和な民主社会にふさわしい身体文化として奨励された。「民主化」＝「スポーツ化」と考えられ、武道も「スポーツ化」していく。すなわちルールや審判規程の合理性が求められていった[井上 2000: 57-61]。

たしかに「スポーツ」は、もともとは暴力的な行為を昇華させたものである。それはノルベルト・エリアスのいう「文明化の過程」のひとつであり、あらゆる方面で自制心が強まる傾向に合わせて、スポーツでも暴力の行使が抑制されてルールに基づく競争や闘いとして「スポーツ」が創り出された[Elias 1969=1977: 139-149]。1896年にアテネで最初の国際オリンピック大会が開催されて、暴力を排したスポーツの祭典が始まる。オリンピックの「アマチュア精神」という理念は、じつは労働者階級を運動のプロを見なして排除し、有閑階級だけで参加者を構成しようとした思想だという説がある[玉木 2003: 17-8]。たしかに井上のいうように、スポーツは、上流階級がみずからの優越性の印として余暇を見せびらかすために実施したものであった[井上 2000: 13]。

さて日本の学校教育に戻ると、竹内は昭和13年（1938年）の東京帝国大学生の調査を紹介している。趣味として映画、音楽、観劇とともにスポーツも入っているのだが、教養主義の牙城である文学部や理学部の学生ではスポーツが上位に入っていない。とくに文学部

においてスポーツは趣味の9位。昭和7年の東京帝国大学生への健康調査でも、文学部学生は「強健」ではなく「虚弱」だと回答している学生が多いという。しかし当時の学生たちは、運動は野蛮であり、むしろ虚弱こそが文学青年のシンボルだと肯定する。ここから竹内は、教養主義の生産工場である帝国大学文学部は他学部に比べて「農村的」で「貧困」で、「スポーツ嫌い」で「不健康」だと特徴づけている〔竹内 2003：113-117〕。

たしかに文学青年の運動嫌いがスポーツ軽視へとつながっているだろう。もっとも、河合栄治郎は戦後、学生の日常生活の心得として毎日の運動を求めている。「午後の運動は絶対に必要である。……健康にいいばかりでなく気持ちの上にも必要なことである。」「ただに健康がよいばかりでなく、精力がみち満ちていることが、人生を渡るうえには、決定的要件である。心の純潔を保つうえからも大事なことである」〔河合 1955：211-2〕。

また河合が編集する『学生と生活』の中では多くの執筆者がそれぞれ、「友情」「恋愛」「宗教」「芸術」「読書」「性欲」などのテーマについて説いている。そのなかで、東京帝大医学部教授で、また同大学運動部総務部長である東龍太郎（1893-1983）が「スポーツ」の項目を担当している。東は、スポーツは大学生活にとって、「研学・思索の本流の bypass として、」その主流から一転して、正しい休養のなかで心身を解放する意味があるという。すなわち「緊張に対する緩和、焦燥に対する余裕、理知に対する情熱、静思に対する活動、独善に対する協和であるところにスポーツの重要性が認められ」という。東は自らも一高・東京帝大でボートの選手だった。

しかし東はベルリンオリンピックなどでいまや「競技成績万能主義」となっていると警鐘を鳴らす。英雄化されて喜ぶ選手もいるが、「スポーツの神髄は不断の修練にある。競技は単にその発露の一閃に過ぎない」のであり、花形選手を偶像化する前に、不断の鍛錬の姿を支持することがスポーツの健全な発展を導くという。東はまたアメリカの大学生スポーツの職業化と競技第一主義がさまざまな弊害を生んでいることを指摘する。広告塔として選手を見る学校、センセーショナルリズムを採る新聞。興行価値ではなく、大学教育として真正のアマチュアリズムの理想を示すべきだと唱えている〔東 1937：359-376〕。

東は昭和34年、1959年に自民党の推薦で東京都知事に当選している。そのときに日本社会党から立候補していた有田八郎を破った。現在日本でも日本版 NCAA の議論がなされており、まさに興行価値とアマチュアリズムとのバランスが問題になっている。

戦前、河合はほとんど「体育」教育を語っていない。河合は高等学校では寮生活における交流とともに、一人のときは読書と静思が大事だという（「高等学校時代の読書」）〔河合 1935：195-200〕。哲学・倫理学を中心にして、外国語、国語、歴史の教育が大切であり、自然科学は文系の学生にはいらぬとも述べているものの、「体育」については何も言及されていない（「高等学校論」昭和10年）〔河合 1935：225-240〕。カリキュラムとしてあるはずだが、河合にとっては自然科学が不要ならば、体育は論外なのだろう。

身体的なるものと、エリート文化との乖離については、竹内洋の興味深い分析がある。竹内は、有田八郎とその妻だった輝井をモデルに三島由紀夫（1925-70）が書いた小説『宵のあと』を分析する。つまり、有田をモデルにした夫の野口は「知識人」であり、近

代的自我を経由して身体へとつながる。ところが妻である輝井をモデルにした「かつ」は庶民であり、行為に直結する身体である。三島はそれを、盆踊り大会での佐渡桶さの踊りに身体を投入する違いによって巧みに描いているという [竹内 2011=2015(上)：44-45]。

竹内が佐渡島を二分して表現しているように、経済的に貧しく文化的伝統にも乏しい地域は、「向こう気ばかりつよくて教養がない」地域である [竹内 2011=2015(上)：49]。これがまさに「ワル」の基盤を示しているが、このような地域には身体に直結した「形」があるといえる。ところが有田にみられるインテリのほうは、つねに理念で考えてしまうために、身体が直接的についてこないのである。こうした逸話は、まさに一高から東京帝国大の文化エリート階層が、いかに運動から縁遠いのかを理解させてくるだろう。

とはいえ、すでに見たように、旧制高校では体育の単位も含まれていた。しかし他方で、アメリカのジェネラル・エデュケーションの影響から、身体形成よりも民主主義社会の市民育成という要素が強くなる。この部分は「進歩派知識人」から旧左翼マルクス主義者まで、「一般教育」に対する大きな主張となる。それゆえ現在でも、戦前の修養主義的な「体育」観よりも、社会性の育成を強調するアメリカ型の理屈が強くなっている。

かつての私の勤務校では教養部が解体されたとき、体育科の教員は教育学部へと異動した。つまり中等学校の保健体育教職養成課程として残ることになる。体育科内の健康科学系の教員はむしろ医学部への異動を望んでいたとも聴くが、しかし結局は子供たちの運動能力を鍛えるための教員養成部門のほうが、まだ「一般教育」との関連性があったのだろう。教養部もまさに一般教育を通じて、「市民育成」の牙城であった点では、教養部から教育学部への異動は違和感が少ないかもしれない。

いまは逆に、スポーツ科学だけで単独で教育課程をつくるなどという発想が出てくるのも、あのスポーツ嫌いの教養主義者が認識する「体育」というものを、体育科の教員のほうで逆手にとっているのかもしれない。「平和の祭典」や「ビジネスへの貢献」、「国民の統合機能」などというスポーツのモテ囃され方を観て、逆に知性主義と完全に切り離れた合理的で民主的な「スポーツ」の存在を主張するに至っている、というべきか。

3-2 左右の急進主義のスポーツ観

近代的な理性あるいは「精神」に対する懐疑から、現代の学問では「身体」というものを基盤に考えようとする動きが顕在化している。人間社会についても動物行動学から考える。また行動経済学は合理性な選択を見るジレンマ論ではなく感覚的な行動から経済を見る。理性からの学問の離反。これは身体行動だけでなく、言い間違えを分析するフロイトの精神分析、集団の古層から行動を考えるユング心理学、集合沸騰として社会制度をみるデュルケムの社会学、近代主体の成立を身体への統制として考えるフーコーの歴史学、文明化の過程を暴力統制と見るエリヤスの歴史学、これらも無意識や感情、身体に注目し、近代人を「理性的主体」とみる教養文化から離反している。

すでにみたように新左翼は人格主義を突き詰める。その結果、暴力肯定、武力主義に行き着いた。これは肉体美を求める三島由紀夫ら盾の会と同じである。どちらも理論よりも

行動主義である。そこからすると、近代理性そのものを批判し、「精神」とは別の基盤として、「身体」というものは重視されることになる。

竹内によると石原慎太郎(1932-)や田村泰治郎(1948-)に観られる生命主義は、そのような肉体の優位を描く。漁師たちの生命力など、「ヴァイタリズム」を表現している[竹内 2003: 77]。さらに竹内は、三島由紀夫が陽明学に傾倒し、ボディビルディングやボクシングに励んだことは、まさに「意志の力や性格の強さ」を鍛錬しようとしたためであるという。そして最終的には盾の会の会員と市ヶ谷駐屯地に押しかけて割腹自殺を貫徹した[竹内 2011=2015: (上)237]。

ドイツでも、左翼批判で知られる社会学者ゲーレン(1904-76)は、それまでの人間「精神」への懐疑から、人間の基礎として生物学的基礎を持ち出している。教養主義的人格主義に対して、理念の力を信じられない時代に肉体へと基盤が移るという「転向」である[Gehlen 1931: 1-7, 16]。

ところが学生運動期の新左翼に支持されたフランクフルト学派のアドルノ(1903-1969)では、身体的基盤は否定される。彼はスポーツというものを近代合理主義と結びつけ、さらにその延長であるナチスの全体主義の表現だと述べた。同じく近代理性に否定的であっても、アドルノのように身体にも否定的な人物と、逆に保守派のゲーレンのように身体に肯定的なものに分かれる。

井上も指摘するように、アドルノによるとスポーツは「全体主義的な大衆集会のモデル」である。そこでは「攻撃性」と「ルールの遵守という権威主義的契機」が結びついて「許された暴力行為」が生じているという。アドルノはウェブレンの有閑階級論を全体的には批判しながらも、しかしウェブレンが大学の体育教育から独裁国家のスポーツ祭典に至るまでを暴力、抑圧、獲物を漁る略奪精神の爆発として捉えている点は正しいと評価する。付け加えてアドルノはスポーツは暴力性だけでなく、さらにはみずから服従して苦しみたいという「マゾヒズム的契機」もあるという。近代スポーツは肉体を機械に同化させようと企てている。それゆえ近代スポーツは「非自由の国」に属するという[Adorno 1955=1995: 99-111]。

こうしたアームチェアの研究者アドルノの教養主義は、学生運動の時に学生たちから強烈に批判される。とくにこのような肉体の否定は、思わぬかたちでアドルノに襲いかかった。しかし、彼が明らかにナチスの政治運動を前提にスポーツについて述べているように、戦後の左翼にとってスポーツこそは全体主義の片棒を担いだものである。

ぎゃくにナチスでは、スポーツはまさに近代主義の発展、古代ギリシャから発するというゲルマン民族の精神を体現するものである。例のJ・J・ヴィンケルマンによる古代ギリシャの彫刻の男性像として均整の取れた体型の理想化は20世紀まで続いてくる。フリッツ・エルラー(1868-1940)による第一次世界大戦時のポスターに描かれた理想化した兵士像もこの近代的な男性像の延長にあり、その態度で精神的な冷静さを示し、凛々と輝く目によって勇気や行動力を表現している。さらには1937年ニュルンベルクでのナチス党大会用ポストカードにも、党と国家を支える同様の近代的人物像が見られる[Mosse 1996:

115-7, 158-160, 170-1]。これはファシズムのイタリアでも、スターリンのソ連でも同じような人物像が描かれている [Ades et al. 1996: 146-7, 216-7, 235-241]。1936年のベルリンオリンピックを材料にレニ・リーフェンシュタール（1902-2003）が作成した映像『民族の祭典』（1938年）も、スポーツを美化して古代ギリシャ人の均整の取れた肉体をゲルマン人の理想の人物だと描いている [Riefenstahl 1938]。ナチスでは強い国家建設のために、軍人としてあるいは労働者として強靱な身体は男女ともに理想の一部を構成した。ナチスは労働と身体を重視する。ヴァイタリズムのほうが、近代合理主義の象徴である均整の取れた肉体美を求めることになる。

逆に社会主義体制の中国共産党になると、西洋と東洋の違いもあるが、身体は重要ではなくなる。同様に労働を重視していても、共産党では革命の精神が大事である。劉開渠（1904-1993）によるレリーフに見られるように、身体よりも赤旗と毛沢東語録をかざして、毛沢東像のバッジを身につければそれで「革命主体」は出来上がる [川田 2000: 102-5, 127-9]。

こうして知識を経由した行動は左翼的、それに対して身体自体での行動は右翼的という通俗的区別がインテリにも蔓延していると言える。さらには、いまやスポーツは教育的要素があっても、むしろオリンピックに表れたように国家や民族の威信をかけたスペクタクル（見せ物）となるし、またプロ野球やプロレスのように大衆のストレス発散の娯楽となる。もともと「遊び」であるはずのスポーツが、その遊び性を取り戻したときに、「学校教育とは縁遠いもの」とされてしまったのである。

（第3章第3節以下、次号に続く）

ここまでの参考文献・引用文献一覧

- 天野郁夫, 1989, 『近代日本高等教育研究』玉川大学出版局
- 井上俊, 2000, 『スポーツと芸術の社会学』世界思想社
- 笠松幸一, 2010, 「デューイと大正デモクラシー」日本デューイ学会編『日本のデューイ研究と21世紀の課題』世界思想社, 31-42
- 川田進, 2000, 「毛沢東像の誕生」, 川田進, 牧陽一, 松浦恒雄『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店, 101-131頁
- 木村幸比古, 2005, 『吉田松陰の実学』, PHP 新書
- 源了圓, 1986, 『実学思想の系譜』, 講談社学術文庫
- 中野秀一郎, 1981, 『プロフェッションの社会学』木鐸社
- 大崎仁編, 戦後大学史研究会, 1988, 『戦後大学史』第一法規出版
- 大崎仁編, 1991, 『大学紛争を語る』有信堂
- 大崎仁 2003, 「「教養教育」の展開過程——制度の変遷と問題の所在——」, 神戸大学大学教育研究センター『21世紀の教養教育を考える 神戸大学大学教育研究センター設置10周年記念シンポジウム (第10回研究集会)』大会プログラム, レジュメ
- 鈴木広, 1970, 『都市的世界』誠信書房
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落』中公新書, 中央公論社
- 竹内洋, 2011, 『大学の下流化』NTT出版,
- 竹内洋, 2011=2015, 『革新幻想の戦後史』上・下, 中公文庫, 中央公論社
- 竹内洋, 2018, 『教養派知識人の運命』筑摩書房
- 玉木正之, 2003, 『スポーツ・ジャーナリズムを語る』国士舘大学体育・スポーツ科学会
- 筒井清忠, 1995, 『日本型「教養」の運命』岩波書店
- 吉田文, 2013, 『大学と教養教育』, 岩波書店
- Ades, Dawn, et al, 1996, *Kunst und Macht im Europa der Diktatoren 1930 bis 1945*, Oktagen Verlag.
- Bollenbeck, Georg, 1994, *Bildung und Kultur; Glanz und Elend eines deutschen Deutungsmuster*, Insel Verlag, Frankfurt am Main und Leipzig.
- Burford, W., H., 1975, *The German Tradition of Self-Cultivation*, Cambridge Univ. Press, London / New York.
- Elias, Norbert, 1934 (1976), *Über den Prozeß der Zivilisation*=1977『文明化の過程』上・下, 法政大学出版局
- Glaser, Hermann, 1990, *Die Kulturgeschichte der Bundesrepublik Deutschland*, Fischer Verlag, Frankfurt am Main, bd. 1-3
- Habermas, Jürgen, 1988, “Die Idee der Universität-Lernprozesse”, in: Eigen, Manfred, et al. 1988, *Die Idee der Universität*, Springer Verlag, Berlin/Heidelberg, S. 139-173.
- Kocka, Jürgen, 1990, 住沢博紀訳「連続と非連続」(講演), 『レヴァイアサン』夏の臨時増刊号, 木鐸社, 所収
- Mosse, George L., 1996, *The Image of Man*, Oxford Univ. Press, New York.
- Ringer, Fritz K., 1969, *The Decline of the German Mandarins*, Harvard University Press=1991 西村稔訳『読書人の没落』名古屋大学出版会
- Sontheimer, Kurt, 1982, “Zwei deutsche Republiken und ihre Intellektuellen”, in: *Merkur*, 1982 Heft 11, S. 1062-1071.=訳1992城達也訳「二つのドイツ共和国とその知識人たち——ワイマ

- ルとボンの知識人の役割』『新聞学』第11号，111-127頁
- Stern, Fritz Richard, 1969, *The politics of cultural despair: a study in the rise of the Germanic ideology*
=1988 スターン，中道寿一訳『文化的絶望の政治』三嶺書房
- 東龍太郎，1937，「スポーツ」，河合栄治郎編集『学生と生活』，日本評論社，359-376頁
- 稲盛和夫，2004，『生き方』，サンマーク出版
- 小野澤正喜，2019，「東大闘争と院生・若手研究者運動に関する一考察」，東大闘争・確認書五〇年編集委員会『東大闘争から五〇年——歴史の証言』花伝社，206-216頁
- 河合栄治郎 1935，『河合栄治郎選集・第一学生生活』，日本評論社
- 河合栄治郎 1955，『学生に与う』現代教養文庫，社会思想社
- 新渡戸稲造，2007，『新渡戸稲造論集』，岩波文庫
- Adorno, Th. W. 1955, *Prismen: Kulturkritik und Gesellschaft* =1996 渡辺祐邦，三原弟平訳『プリズメン』筑摩書房，ちくま学芸文庫
- Horkheimer u. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung*, =2007 三島憲一訳『啓蒙の弁証法』岩波書店
- Gehlen, Arnold, 1931, “Wirklicher und unwirklicher Geist” in: *Gesamtausgabe Band1*, 1978, S. 113-381, Vittorio Klostermann
- Riefenstahl, Leni, 1938, =リーフェンシュタール『民族の祭典』
- 大学教育学会 大学企画委員会・実行委員会，2001，『大学教育学会第23回大会 発表要旨集録』
- 大阪経済大学，2011，「(財)日本高等教育評価機構による認証評価の結果（2010年度）・自己評価報告書・本編」 <https://www.osaka-ue.ac.jp/file/general/934>
- 日本共産党中央委員会出版局編，1969，『当面する大学問題』，日本共産党中央委員会出版局
- 21世紀研究会（平等文博・文章）2006，「「こころの時代」と「こころ化」の論理」（『21世紀研究会2006年10月例会』例会案内チラシ）
- リクルート進学総研（能地泰代/鹿島梓），2017，「グローバル化と技術革新の新たな波がトレンドに色濃く影響」『カレッジマネジメント・学部・学科トレンド2017』205号
http://souken.shingakunet.com/college_m/2017_RCM205_06.pdf